慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田史学の伝統を考える
Sub Title	A brief consideration for the tradition of historical studies at Keio University
Author	三木, 亘(Miki, Wataru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.5(179)- 8(182)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田史学の伝統を考える

三木　亘

たった二回の座談会というほんの限られた仕方ではあったが、「三田史学の百年」をふりかえってみてつくづく思うのは、三田の先師たちが、いまも意味のあるすばらしい伝統を創出されたということである。在野性と個人性ともいうべきものがそれであると思う。

もとより、いくたびも官に招かれながらもついに官途に就かず、終生諭吉個人として野にありつづけた福沢の人間としてのあり方が、その原点であるが、座談会のなかにもみられるように、この伝統は、いまからほぼ百年のむかし、慶應義塾大学学部創設のころに、あらためて創造されたものでもあった。学部創設の中心人物である田中萃一郎はあきらかに、意図的自覚的に在野の途を選んだ。

それをもっとも明白に示すのは、田中が、このころ大学の史学科を日本史・東洋史・西洋史の三学科とした官学の手法にあえて倣わず、慶應義塾は史学科一本とした事実である。田中自身の著作も三分化にはおよそとらわれず、自由闊達に各分野に筆を伸ばしている。

このことの意味はきわめて大きい。

田中が学部を創設した時期は、西欧の世界的覇権のもとに、弱肉強食、優勝劣敗の力の論理がまかり通る野蛮きわまりない時代であった。そのなかにあって日本列島の住人は、弱者として、一方では亡国の危機感を持つと同時に、他方では強者たらんと粒々辛苦する存在でもあった。日清、日露の両戦争はこの状況からの転機となった。両戦争における日本の一応の勝利は、日本列島においては、ようやく強者である西欧諸国の隊伍にはいれたという実は幻想的な安心感をうみ、そのうえにらち

もない西欧幻想が紡ぎだしはじめられる。他方、西欧による抑圧と搾取のどん底にあったアジア・アフリカ諸地域においては、当時もっとも侵略的であったロシア帝国主義を打破った弱者の日本に大きな歓呼と期待が寄せられるが、日本国家は数年後の日韓併合を手はじめに、この期待を裏切る途を歩んでゆく。

歴史認識の枠組は世界と自己の関係の函数である。官学における史学科の三分化は、以上のような転機によって、強者の一員になろうとする日本国家の世界認識のあり方を如実に示している。西洋史は強者のモデルである西欧に、東洋史は日本が強者として展開しはじめた弱者の地域である東アジアに、それぞれ対応し、日本史を支えるのは、西欧近代文明の代表的なレパートリである近代国家パラダイムである。ここに確立されてゆく日本国家を背負うべき、官僚養成所兼西欧舶来御学問輸入所として設立された官学が、このような世界認識の枠組を採用したのは当然であったろう。

田中萃一郎はあえてそのような国家的志向にしたがわず、史学科一本をつらぬいた。そういう田中を支えた世界認識はどういうものであったのか。そういう観点からの田中の業績の検討は今後の大きな課題だと思うが、それは当然、山路愛山や竹越与三郎など、かれと親近した在野の史論史学の人びとの仕事の検討と、関連して行わなければならないだろう。

経済史というジャンルの開拓も在野性の表現と見てよいだろう。竹越三叉もぼう大な日本経済史を編んでいるが、幸田成友のパイオニア的な仕事が、偶然であったかもしれないが、いわばいつの時期も在野の都市であった、大阪の市史の編纂からはじまった事実はたいへんおもしろい。また、福沢の在野性の根には強烈な実学志向があり、その門下から近代日本経済を開拓していった偉才が輩出しているが、そのことも当然経済史の創始と関連していよう。慶応義塾は、近代日本経済そのものばかりでなく、経済史をも開拓していったのである。はだか一貫で、圧倒的に強力な西欧経済と対決していった塾員たちのあいだには、おのずからなる世界性と、それと関連するお酒落な伝統もはぐくまれた。幸田の日欧通交史にはじまるジャンルがそれである。

なお、幸田成友は大阪市史を編むにあたって、大阪商人のあいだで一種のフィールドワークを行ったということを林基さんにうかがったが、実学の精神ともつながるこのフィールドワークの伝統は、松本信広を代表とする

民族学・東洋史や、また当然のことながら考古学においても、もっともよく生かされた。

個人性ということばで表現した三田史学の先師たちの性格も、在野性と切りはなすことができない。国家的志向に乗った研究者の場合には、ある意味で農村共同体の延長上にある、近代国家という幻想的な共同性に呑みこまれてゆく面があるが、あえて野にある研究者の場合、人のうえに人をいただかないのが本領であろう。

ところで、このような在野性を根幹とする、世界性、個人性、お酒落などの伝統のかずかずを前にして思うことだが、伝統はまもるべきものではなく、創出すべきものである。あたかも、先師に対する最高の礼は学問的に先師を超えることにあるのと同様に。ある伝統のなかで育った人間は、その伝統をすでにからだのなかに持っているのであって、それを「まもる」などとうしろむきに考えるべきではない。前むきに虚心に世界に向きあって自由に認識を追求してゆけば、おのずから結果として、からだのなかにある伝統が生きる、あるいは創出されるものである。

たとえばいま慶應義塾大学文学部史学科のスタッフのあいだで、日本史・東洋史・西洋史・民族考古学などという専攻は制度としてはおいておいても、実際には無視して自由に交流してゆけばよいという考え方が、ほとんど自明の了解事項になりつつあるが、これはべつに、田中萃一郎の史学科は一本でという伝統を「まもる」ためにそうしたものではない。それどころか、田中がそういうことをしたということを知らなかったスタッフも多い。現代の現実のなかで真剣にそれぞれの学問を追求するなかで、おのずからそうなっていっただけのことである。さらにすすんで、史学科というよりは地域研究的な内容のものにしていった方がいいのではないか、といった考え方もひろく出てきている。

現代の現実は田中萃一郎や幸田成友の当代の現実とはもとより、松本信広の時代の現実ともたいへん違った条件を持っている。地球がおそろしく小さくなってしまって、学生諸君でもごく手軽に世界の各地へ旅してしまう。また世界じゅうの人びとがたくさん日本列島へやって来ている。田中の時代はもとより、ほんの三、四〇年前までは、「洋行」などごくわずかな人にしかできないことであった。その洋行もほとんど西欧にかぎられ、洋行帰りの人には箔がついて、西欧の大学者の学問を祖述ないし訓詁ないし密輸入してえらぶるという、いまの私たち

からすれば、いささかマンガチックな光景が、つい最近まで存在した。

ところがいまは違う。アジア、アフリカを含めて、世界じゅうのさまざまの風土と人間とその言語に私たちは容易に接することができるようになった。このような条件を考えると、時代も地域もひどく小刻みに、文字史料だけで歴史をやることに、いったいどれほどの意味があるのだろうと考える人たちが出てくることも、ふしぎではない。歴史学といわず、世界認識の仕方をドラスティックに変える必要があるのではないか。

そう考えた場合、三田史学には先述のように、フィールドワークの方法を駆使した伝統がある。それどころか、変動する世界を感じとった無名の若者が、オランダ語からより実用的な英語に勉強を切りかえ、志願して幕府の船に乗って何か国かをまわり、好奇心にもえて見聞を積み、帰国すると『西洋事情』を書いて人びとの世界認識にショックを与え、さらには『文明論之概略』を書いて世界認識と相関的に自己認識を深めた、そういう福沢諭吉の例は、いま地域研究を試みている人びとの行動パターンと結構似ているのではないか。もとよりその場合、かれらのほとんどは福沢にならって地域研究をはじめたわけではないだろう。

なお、座談会の過程で、三田史学は理論に弱いという声もあったが、福沢の文章の多くはみごとに理論的である。また、ある意味では、日本の近代歴史学は総じて理論に弱かったといえるかもしれない。日本とは違った条件を持つ西欧人が西欧人の必要から西欧人のためにうみだした理論を、祖述・訓詁・密輸入したりしたものは、本来の意味での理論とはいいがたい。はだか一貫で世界にたちむかい、大胆に問題を設定し、文字資料、フィールドワークその他を駆使してそれを解いてゆく。その認識行動の軌跡を抽象化した、本来の意味での理論の創出は、三田史学にかぎらず、日本の歴史学全体にとっても、いまようやくはじまったばかりだと言えるだろう。

伝統というものはそんなふうに考えていいのではないだろうか。ひとりで虚心に世界とむかいあい、自由闊達に認識を試みれば、それはおのずから先師の道にかない、あらためて伝統が創造されるのではないかと思う。

さいごに、早急なお願いにかかわらず、こころよく座談会に御参加、お話しいただいた先生方、まことにありがとうございました。